

壺中天

その32 「Freude(歓喜)」から「Freiheit(自由)」へ〈ベルリン〉

高校教諭(非常勤)、マンホール蓋愛好家 垣下 嘉徳

2020年の周年記念

「来年のこと言うと鬼が笑う」という言葉がありますが、過ぎ去った年のことだと鬼はどうするのでしょうか。やはり、鬼は笑うようです。はたして2021年は、コロナも収まって安穏な世界となるでしょうか？

さて、2020年12月16日はベートーヴェンの生誕250年にあたります。この記念すべき年ということで、ベートーヴェンにちなんだ演奏会が多く企画されましたが、コロナ禍のために多くが見送られました。しかし、リモートによる演奏会などの工夫がなされ、かたちを変えながら実施されました。年末恒例の『第九』の演奏会ですが、さすがに2020年は、晴れ晴れと満員の聴衆を前にしての演奏、とはならないことでしょう。

ベートーヴェンの母国ドイツ連邦共和国は、2020年10月3日の建国記念日に、東西統一から30周年を迎えました。コロナ禍で大規模なイベントは開催されず、規模を縮小した記念式典が行われました。ベルリン近郊のポツダムで、シュタインマイヤー大統領やメルケル首相ら約200人が参加しました。30年前、資本主義の西ドイツと社会主義の東ドイツが長い分断を経て一つになり、EU(欧州連合)の大国となりました。

東西の交流は着実に進み、国民の多くが統一を「成功の歴史」と捉える一方、経済格差は依然と

して残っており、国民の半数近くが、今も社会の溝を感じているようです。式典でメルケル首相は、東西が共存するには「勇気が必要だ」と訴え、「若い世代のため勇気を持って新たな道を歩んでいきたい」と述べた、と報道がありました。

ベルリンの壁

第二次世界大戦の敗戦国となったドイツは、1949年ソ連を盟主とする共産圏の東ドイツと、アメリカを筆頭とする西側の一員としての西ドイツに分断されてしまいました。さらに、首都のベルリンもソ連の管理区域と米英仏三カ国が管理する西ベルリンに分断されました。1961年8月13日に東ドイツが東西ベルリン市民の往來を禁止し、国境が封鎖され、有刺鉄線が張り巡らされました。さらに高い壁が築かれました。道路の真ん中、運河や橋の真ん中が国境線となり、建物の真ん中でも分断されました(写真-1)。

そうして壁が崩壊する1989年までに、5,000人近くが越境しましたが、136人が越境できずに命を落としています。国境警備兵による射殺や運河を泳ぎきれずに溺死した人もいました。越境を試みて失敗した人も数千人に及んでいます。

この壁は、単に東西ベルリンの境界だけでなく、西ベルリンそのものも囲んだために、総延長155kmに及びました。しかし、東ベルリンの自由を求める人々の声は高まり、ついに外国旅行の自由化



写真-1 ビルを分断して伸びるレンガのラインは、壁のあった跡



写真-2 壁の崩壊後、演奏会が開催されたシャウシュピールハウス（奥）とX'masマーケットのテント

の政令が出され、東西対立の象徴であったコンクリートと鉄条網で分断されたベルリンの壁の崩壊に繋がりました。1989年の11月9日のことでした。

● ベートーヴェン『第九』は

そして、その年1989年のクリスマスに、ベルリンのシャウシュピールハウス（旧王立演劇劇場）（写真-2）で、20世紀を代表するユダヤ系アメ



写真-3 ドイツのデザイナーの人生を変えた(?)桜の蓋 [上野公園]



写真-4 ドイツで開催された蓋の写真展

リカ人の名指揮者バンスタインが、肺がんに蝕まれながらもタクトを振りました。

演奏したのは、旧西ドイツのバイエルン交響楽団、旧東ドイツのシュターツカペレ・ドレスデンをはじめとした、冷戦で敵対したアメリカ・イギリス・フランスとソ連を代表する演奏家たちで構成されたオーケストラでした。合唱団もソリストも、東西二つの陣営という壁を取り払ったメンバーでした。曲目は、ベートーヴェンの交響曲『第九番合唱付き』です。幾重もの壁が取り払われた演奏会でした。

『第九』は1824年の初演以来、通常の演奏会にとどまらず、第一次世界大戦の終結時、バイロイト音楽祭の復活の時など、数々の大事な場面で演奏されてきました。ドイツ人にとっては大事な音楽でした。年末に日本人が、風物詩として『第九』を好むことは意味合いが違います。

ベルリンの人々にとって、東西の壁が取り払わ

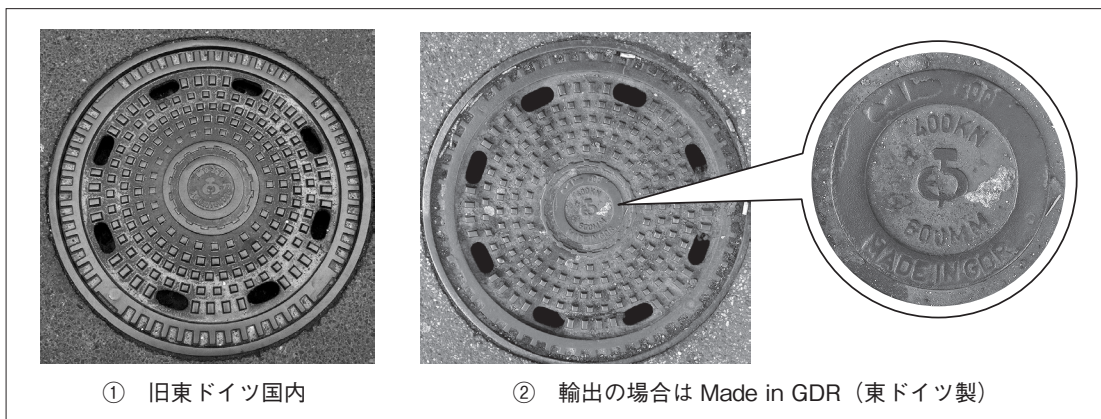


写真-5 ハンマーと鎌のマンホール蓋



写真-6 チャーリー・ポイント（検問所の名残り）のそばにあるマンホールの蓋

れて、掴んだ「自由」でした。演奏会では、シラーの歌詞にある「Freude（歓喜）」を「Freiheit（自由）」に置き換えて、掴んだ自由を祝しました。

ベルリンで蓋の写真展

10年前、知人のベルリン在住の宝飾デザイナーから、ドイツ技術博物館で開催されるマンホール蓋の写真展の、オープニングセレモニーに招待されました。

知人は、かつて東京・上野の満開の桜に感動し



写真-7 記念センターで保存されているベルリンの壁

ましたが、さらに足元の鉄蓋に描かれた桜にも感激し（写真-3）、その後日本国内を巡る旅ですっかり、マンホール蓋に魅了されました。帰国後にベルリンの鴉外記念館で、蓋の写真展を開催しましたが、さらなる発表ということで、技術博物館の協力を得ての開催でした（写真-4）。

招待とはいえ、費用は自分持ちでした。それでも滞在中は歩き回り、鎌と槌の社会主義のシンボルを描いた旧東ドイツ製をはじめ、多くの蓋に出会いました（写真-5、6）。そして、保存されたベルリンの壁もタッチしました（写真-7）。

人類はこれまで移動し交流することで栄えてきましたが、新型コロナは、それに急ブレーキを掛けました。しかし、負ける訳にはいきません。勝利を勝ち取った暁には、世界中で『第九』を歌うことになるでしょう。